

研修名 支援を必要とする子どもの保育

令和元年7月23日(火) 10:00~16:00

講演 「乳幼児期の発達と発達障害の理解」

講師 平安女学院大学短期大学部 清水 里美 氏

1) 講演要旨

① 子どもの砂遊びからの発達の理解

- ・お座りが確立し、両手が自由になると、様々な物への興味関心がでてくる。1歳児の子どもは砂場へ出ると、砂そのものよりも、玩具で遊ぶ姿があり、玩具を手に持ち、玩具の操作を通して砂遊びをする。1歳児の子どもは「砂で遊ばない砂遊び」を経験している。つまり、1歳児が砂遊びをする時には、「道具」が必要である。
- ・2歳児は保育士の真似をして型抜きをして遊んだりする。スコップで砂をすくい、押さえ、手の平にのせてみるなど、様々な動きをし、道具を扱う能力が向上してくる。また、少し湿っていないと型抜きができないこともわかるようになり、砂の性質にかかわって遊ぶ。型抜き遊びは、物の操作を通して砂遊びをする到達点である。道具がなくても、砂に水を混ぜて遊んでみるなど、混ざり合う様子を体を通して実感していく姿があり、2歳児では「砂で遊ぶ砂遊び」を経験している。
- ・以上のように発達がわかると、準備が出来、次がどの段階かわかり、見通しを持って保育を行うことが出来る。

② 発達は成熟と学習からなる

- ・遊びの中で大人のモデルやお兄ちゃん、お姉ちゃんがやっていることに刺激を受け、やってみようとする姿があるが、発達ができていても、このモデルがないと経験することができず、育っていかない。小さいうちに様々な刺激を受け、何度も経験することが大切である。

③ 認知について

- ・子どもは見た目の違いに飛びつきやすいが、そこから自分で見たり、感じたり、聞くことで、少しずつ役割や用途が違うことに気が付いていく(就学前の発達)。

例えば救急車と消防車の違いであれば、小さいうちは色が違うことで違いを認識しているが、年長ぐらいになると救急車は病気の人を乗せる、消防車は火事の時といったように、違いとして役割や用途が違うことを挙げるようになる。

- ・記憶には短期記憶と長期記憶の2種類あり、すごく楽しい、嬉しい、怖かったなど、ワクワク、ドキドキする体験は短期記憶から長期記憶に移行しやすい。子どもたちは繰り返すことが大切で、繰り返すことで学んでいく。集中してほしいことだけを、環境の中でピックアップする。また、自分でやり遂げることが大切で、できた時には一緒に喜んでもらうことで自己肯定感を育てていく。

④ 愛着形成

- ・愛着関係は親と子どもとの関係であるが、本当は親に求めたいが求められないこともあるので、その時は保育園にいる間に担任との関係をしっかりと築いていく。愛着関係

を形成した上にしつけがある。安心できる環境にすることで、子どもたちは、いろいろなことに興味を広げ、認知の世界を広げていく。

⑤ 自己理解、自己選択

・自分で決めたことを自分でできる力が、大きくなっていく中で大切。他者と比べたり、絶対評価するのではない。もし評価するのであれば、「昨日はここまでだったが、今日はここまでできて、すごい」と、いった個人内評価をするほうが自己肯定感が育つ。こういったことを就学前の間に、親御さんに伝えていくことが大切である。

⑥ 社会性

・自分と人の違いがわかり、人とぶつかり合うことで社会性を身につけていく。他者との間で自分の気持ちをコントロールしていくのである。社会性は一生をかけて育てていくもの。「わがまま」と見える行動も社会性の学習をしているのである。

⑦ 記録について

・個別支援計画では、行動前と行動後をしっかり記録する。目立つ行動だけでなく、流れを記録し、この時、何を学んだのかを考え、支援方法を考えていく。環境から子どもが何を学習しているのかを見直す。

⑧ コンサルテーションの内容

・設定保育では、子どもが選択できる機会を提供する。できなくて逃げてしまい、「じゃあ、これをあげる」では、その子にとってごほうびになり、逆効果になるので、逃げる前に自分で選択できるよう、コントロールしてあげることが大切である。

⑨ 「発達障害」

⑩ 「発達障害」は特性理解から支援が始まり、こだわりはストレスや不安で強くなる。感覚については我慢することができないので、これらの問題には配慮すべきである。そして、親が気にされている姿が園での気になる姿につながるが多いので、親の気にされていることにはしっかり耳を傾けていくことが大切である。

2) 感想

発達を正しく理解することで先を見通し、保育することができるので、どんな環境を設定したらよいのかが明確になり、子どもたちに安心した環境を提供することができ、発達理解の重要性が再認識できました。また、コンサルテーションの内容で「設定保育の中で選択できる環境を提供する」ということを言われていたのですが、発達障害の有無に関わらず、自分で選んで、選んだことを自分でできるという力は幼児期にとっても重要なので、様々な場面で、そういった機会を保育士自身、意識的に作っていき、自己肯定感を育ていけるよう子どもたちとかかわっていきたいと思います。

(記録：舞鶴市立中保育所 倉内 晶子)